



ぼくおぼし

文・絵

小貫則子



ぼくたちおばけは、^{やま}ポロボロ山^{もり}っていう森^{なか}の中に^す住んでいるんだ。

そこは、^{てい}手入れも^{さとやま}されてこ^{もり}なかつた里山に、ぐるりとかこまれた森。

^{なつ}夏^きなんか、^{えだ}木の枝^{くず}に葛のつるとかが、びっしりとかぶさっている。

そこら^{じゅう}中^{みどり}が「^ぼ緑お化け^{ぼしよ}」って呼んでもいいような場所なんだ。

^{かぞく}ぼくの家族は、

^{もり}その森^きの木^{うえ}の上^くで暮らしている。



だいたい、おぼけて^{たまご}卵でうまれるんだよ。

その卵は、^{あか}赤、^{きいろ}オレンジ、^{きみどり}黄色、^{みどり}黄緑、^{あお}緑、^{むらさき}青、^{いろ}紫、の七色なの。

模様は、^{なか}中の^ぼあかんぼお化けの^{せいかく}性格に似ているんだって。

ぼくのお姉ちゃんのは、^{ねえ}雷^{かみなり}みたいな^{もよう}模様の^{たまご}卵。

うまれたときから ^{げんき}とっても元気で

「ヒャオヒャオ ヒャオヒャオ」って、

^{うた}歌^なうみたいな^{ごえ}泣き声^たを立ててうまれたんだって。



ぼくの ^{たまご}卵 は、^{けむりもよう}煙 模様 だった。

ぼくは、なかなかうまれてこなかったんだ。

^ま待ちくたびれたおねえちゃんが、ぼくの ^{たまご}卵 に乗っかって

、「あかちゃん、あかちゃん。わたしが、おねえちゃんですよ。

^{はや}早く ^で出ておいで。いっしょに ^{あそ}遊ぼう」
って ^よ呼んだんだって。

その ^{こえ}声 を ^{おぼ}覚えている ような ^き気がする



なが たまご なか
そうしてずいぶん長く 卵 の中にいたよ。

でもやっとうまれてきて、赤ん坊のおぼけになった

うまれてきたときは

「フヒャアー」と、あくびばかりして 泣かなかったんだって。

いま
でも今は、しょっちゅう泣いてるよ



ぼ
お化けは、

おかあさんのふわふわおなかの^{した}下にもぐるのが、^{だいす}大好き。

きっと ^{たまご}卵 だったときおなかの^{した}下にもぐっていたんだね。

^ひある日、いい^{きぶん}気分でお^{かあ}母さんのおなかの^{した}下にもぐっていた。

そこへ、^{ねえ}お姉ちゃん^{ねえ}が来て、ぼくをひきずりだすんだ。



「いやーん。お母さんのおなかの下はぼく**の**場所。

おねえちゃんは、あ**っ**ちに行きなさい」

だって、おねえちゃんは、もう森の中**を**歩くこともできるし、

狸**だ**の、ふくろう**だ**の、のねずみ**だ**のと、いっぱい遊び**友**達もいるんだよ。

あかちゃん**じ**ゃなくて、もう子供**だ**よ。



でも、おねえちゃんはぼくを^{みお}見下ろして、こ^いう言うんだ。

「お^{まえ}前は、ほんとにワカランチンだねえ。

お^{かあ}母さんのお^{した}なかの下は、

あんたが、^{たまご}卵になるずっと^{まえ}前から、あたしの^{ばしょ}場所だったんだよ」

ぼくはビックリした。

「じゃあ、そのときぼくは、どこにいたの？」

おねえちゃんは

し
知らない。そんなこと」



なんだかとても頼たよりない気分きぶんになって、わあわあと泣いたよ。



かあ　だ
お母さんが、ぼくを抱っこして

「ぼうやはそのころ、お母さんのまわりで、

きらきら光るひかりになってて、くるくる回っていたのよ」

い　りょうて　たか　たか　も
そう言って、ぼくを両手で高く高く持ち上げてくるくるまわした。

き　うえ　こ　は　ひか
木の上で木の葉もキラキラ光った。



ぼくは、うれしくなって

おかあさんのほっぺにほっぺをつけて

^{かあ} ^{だいす}
「お母さんが大好き。大きくなったら、
^{かあ} ^{けっこん}
お母さんと結婚するんだ！」



おねえちゃんが、おかあさんのおなかの^{した}下から^{かお}顔^だを出した。

「ほんとに、

あんたは、ワカランチンだねえ。

お母さんと^{かあ}結婚^{けっこん}できるわけないでしょうが！」

「エーッ！なんで？」



「だって、
お母さんは、もうお父さんと結婚してるんだよ」

なんだかとってもさびしくなって、

さめざめと泣いた



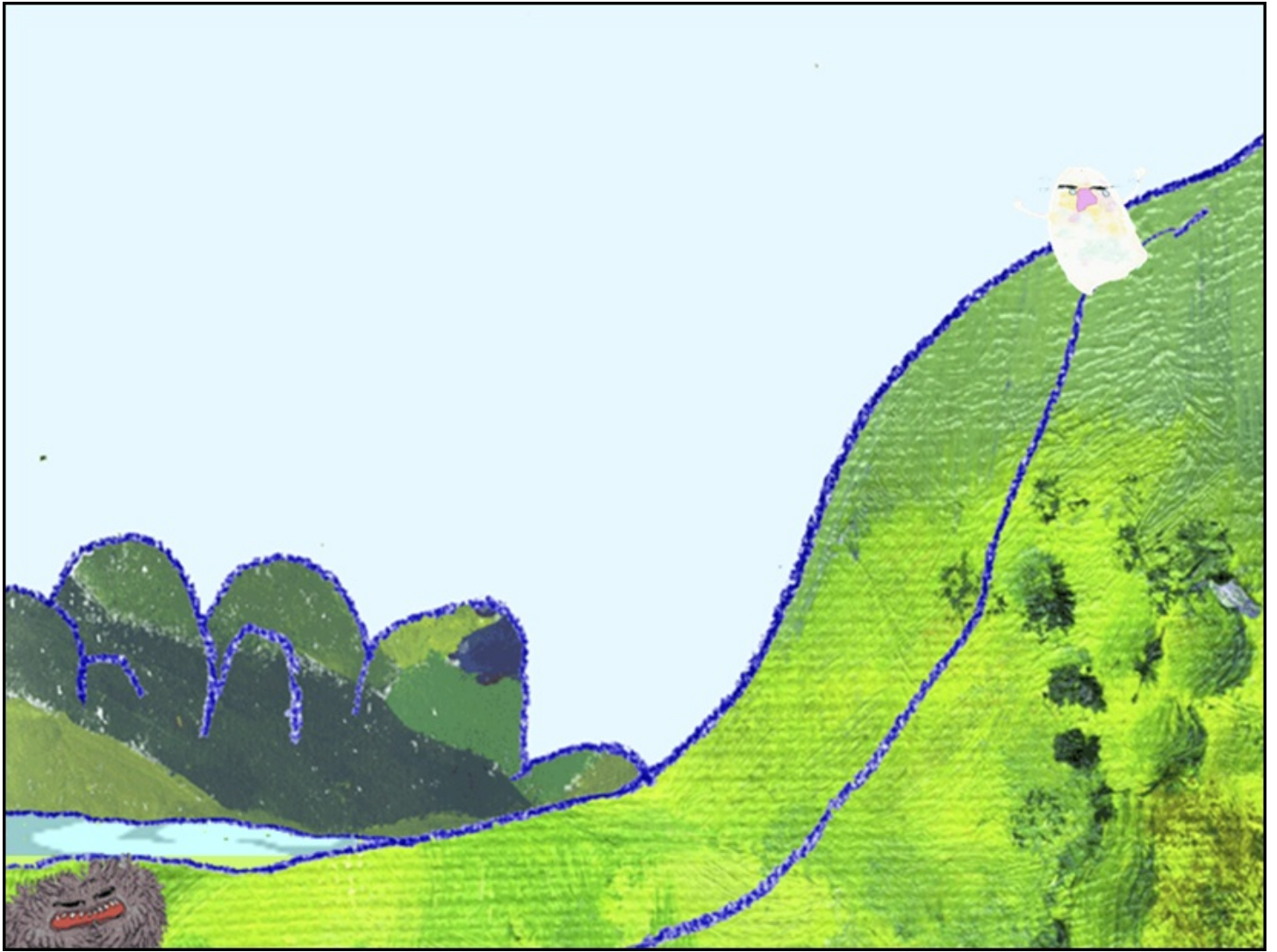
ぼくは、木を降りて修行しゆぎよう に出て行くことにした。

あかちゃんお化けではなく、子供お化けこども ぼになるために。

森の中あるを歩いていくと、木がどんどん大きくなるような気きがした。

なんだか、暗くらくなってきたような気きもした。

なんだか、怖いお化けこわ ぼが、いるような気きがした。



「うわあ!!」

あし
足をふみはずしたら、滑る滑る滑る。
すべ すべ すべ

さか すべ お ちい かわ ところ
坂を滑り落ちて小さな川の所へ出てきた。

そこには、何かいる。
なに



「なに、あれ！お化けじゃないよ。なんか、^{へん}変なもの」

そいつに追いかけてられて、さっき滑った坂を^お一生懸命^{すべ さか いっしょうけんめいのほ}上った。

うしろから来たそいつは、いつの間にかぼくと並んで坂を上ってる。

おお^{くち さ}大きく口が裂けていて、

なが^{した た}長い舌が垂れていて、



それに臭^{くさ}いし。

心臓^{しんぞう}がぼくを揺^ゆさぶってる。

「ドップンドップン」

「どうしよう。」

「ハアハア」



やっと坂^{さか}を上^{のぼ}ったら、

そいつが、

そいつが、

そのながーい舌でベローンとぼくの顔をなめたんだ。

「きゃあー」

「ぼく、食べられちゃうんだ。助けて！」



め
眼をぎゅうつつぶって、^{いき}息をひっくひっくさせて泣いた。

「おい！おーい！お前^{まえ}はお化けなんだから、ふわふわ^と飛べるんだよ。なに泣いてるのさ」

おねえちゃんの声だ！

そうっと^{め あ}眼を開けたら、おねえちゃんに^だ抱っこされて、浮かんでいた。

「ああ、^{たす}助かった」



おねえちゃんにしがみつ^{した}いて下^{みお}を見下ろした。

ほんとにあの大きな口^{おお}は、かみつ^{くち}かないんだらうか？

「おねえちゃん。ほんとうに浮^うかんでるよ」

「あたりまえよ お化^ばけなんだから」

「おねえちゃん大好き^{だいす}。大き^{おお}くなったら おねえちゃんと結^{けっ}婚^{こん}することにした」

「ああ。お前^{おまえ}は、ほんとにワカランチンなおばけ。

きょうだいは 結^{けっ}婚^{こん}できないのよ」



「エエーッ 」

びっくりしたとたん、
お
落っこちちゃった。



「わー あいつが来る。こわーい」

ビヤーっと
な
泣いたら、
そいつは
なみだ
ぼくの涙を
みんな、なめてくれた。



「おまえ、だれ？」

「おれ、
なんじゃもんじゃのペローン」

けむくじやら くび だ
毛むくじやらの首を抱くと、

なんだかとても あたた暖かかった。



こうしてぼくにも^{もり なか}森の中に^{ともだち}友達^がができた。

こんどは

ちゃんと

ひとりでふわふわ^う浮かんでおうちに^{かえ}帰ったよ。